

リポート

こども園をつくる

—文京区立お茶の水女子大学こども園の記録—

Vol.9/「夕方の保育」の可能性を探る

宮里暁美・田島大輔



長時間保育のニーズが高まる中、認定こども園における「教育時間外の保育」や幼稚園の「預かり保育」を各園ではどのように行っているのでしょうか。教育時間の保育とは区別し「家庭的な雰囲気ですぐ」と称されているものの手探りの状態のように思われるこの時間帯の保育を、本園では「夕方の保育」と名づけ、開園以来実践と研究を重ねています。平成三十年二月十八日に実施した第二回お茶大こども園フォーラム第五分科会においても、「夕方の保育」をテーマとして熱心な討議を行いました。本園の取り組みについてまとめます。

本園の課題や可能性と取り組みの方向性

夕方の保育をどのようなイメージで考えていくのか、話し合いをする中で明らかになったことは次の点です。

- 異年齢のかかわりを大切にする
- 地域社会で行われていた遊びの再生

宮里暁美（みやさと あけみ）
文京区立お茶の水女子大学こども園園長。

田島大輔（たじま だいすけ）
和洋女子大学人文学部子ども発達学科助教。
文京区立お茶の水女子大学こども園 元保育士。

○さまざまな人やものとのつながりを生かす
○日暮れから夕暮れへの流れに沿う

これらのことを実現するために、まず本園が抱える課題を整理し、その解決方法を考えあいました。以下の二点です。

課題1…教育時間の保育とそれ以降の保育を同一のスペースで行う

さまざまな園を視察すると、夕方の保育を別スペース（別棟や別室）で行っている園によく出会いました。スペースを変えることで保育内容が変えやすくなりますが、スペースに限りがある本園では、同一のスペースの中で違いをつくる必要がありました。

解決策…夕方の保育の場にも特色をもたせる

・駐輪スペースの遊び場化

こども園玄関前の駐輪ス



スペースを十五時半から一時間ほど、遊び場として活用してみました。路地裏遊びのような雰囲気になり、子どもたちも喜んでいました。

・二階のスペースを狭める

子どもの数の減少に合わせて、活動に使用するスペースを少しだけ縮小してみました。ついたてを置くことで「今はこちらで」ということを伝えていきます。

・プランへの子どもたちの参加

夕方の時間にどのようなことをしたいか、子どもたちに聞く機会も設定してみました。夕方も散歩に行きたいという声を受けとめ、散歩に出かけることもあります。

課題2…担任が教育時間外の保育も行う

教育時間外の保育を専任の保育者が担当する園があります。非常勤保育者の場合もありますが、常勤保育者が担当し教育時間の保育とのつながりを考慮しながら保育を構想する園も多く見学し、望ましい例と感じました。

しかし本園ではその方法はとらず、学級担任が時間外の保育も担当することにししました。人的配置のためやむを得ずということもありますが、積極的な意味で教育時間外の保育を考えたいという思いも根底にありました。そのようなあり方の中でより良い夕方の保育を構築するために工夫を始めました。

解決策…夕方の保育を構想する担当者をおく

・夕方の保育のコーディネーター制を導入

学級担任群（四、五歳児担任四名）の中から一名が中勤務（九時三十分～十八時三十分）となることで夕方の保育をコーディネーターする役割を担えるようにし、午後勤務の非常勤職員や他の担任と連携して保育を進められるようにしました。

・夕方の保育の計画や振り返りの実施

緩やかな計画立案と、子どもの様子を出しながら振り返りを行うことで、夕方の保育の可能性を探っています。

・見えてきた可能性

日暮れ頃からは室内でゆっくり過ごすようになります。子どもの数が少しずつ少なくなっていく十七時以降の保育では、そこに訪れる大人とのかかわりに可能性が感じられます。迎えにきた保護者や祖父母の方が遊びの続きに少しだけかわったり、大学生のボランティアが遊びに来たり、多くの可能性がありそうです。

（宮里暁美）

夕方の保育の実際

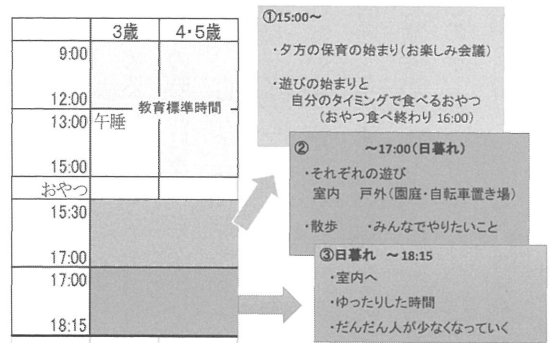
―夕方の保育を担当して見えてきたこと

平成二十九年度一学期、夕方の保育のコーディネーターを担当することになりました。保育者間で話しあい、試行錯誤を重ねながら、次のような取り組みを行いました。

1 試行錯誤を支えあうチームの構築

まず、保育者同士がイメージをどのように

夕方の保育の層のイメージ



実現するか、考えあい共有しあうチームの構築から始まりました。夕方の保育の各々のイメージを実現するために何をしたらよいのか議論する中で内容を深めていきました。時間ごとに変わる子どもたちの姿から、それを色として捉えることにより基本の流れをイメージ化し、実際の夕方の保育の基本的流れとして構築していききました(左図参照)。

職層や立場の違いを大切にしつつも、イメージという曖昧でさまざまな捉え方のあるものだからこそ、意見を出しあい考えることを大切にしました。実際に保育をしながらそこで疑問に思ったこと、自分はこう感じたというそれぞれの感じ方を大切にして伝えあつたことにより、チームとしての一体感が生まれできました。このように、少しずつイメージが具現化されてきました。

2 時間帯により見えてくる子どもたちの姿

夕方の保育を考えていく上でも、一日の保育の流れ、連続性を意識して考えていく必要があります。本園では「どの時間帯の保育にも大切な意味がある」と考え実践しています。保育者間で語りあう際にも、具体的な子どもたちの姿を出しあうことを大切にしています。

〈夕方の時間を選んでじっくり遊ぶM児〉

M児(五歳児)はおやつ時間が終わると



教材庫（空き箱や空きパックなど廃材が置いてある場所）に行き、素材を大量に選り出し、製作を始める日が続きました。毎日のように、なぜかその時間になると大量にものを作り始めますが、自分で黙々と作るというよりも、保育者にアイデアや助けを求めるといった姿が見られていました。

保育後、このようなM児の姿について保育者同士で話しあいました。「教育時間のときに制作ができるように声をかけたほうがいいのか」「満足していない部分があるのではないのか。担任がもっとかわったほうがよいのでは」という意見も出ましたが、M児の姿からは、この時間帯を選んでいるのではないかという思いもあり、まずM児のやりたい気持ちを大切にしていこうということになりました。

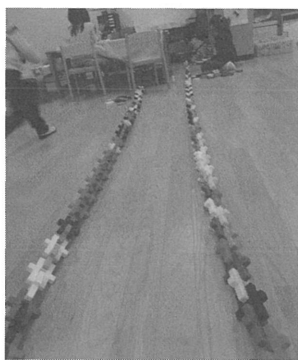
保育者がじっくりかかわっていくと、「本物に近いものを作りたい」というM児の願いを聞くことができました。本物に近いものをじっくり落착いて作りたいからこそ、人の少なくなるこの時間を選んでいたのかもしれない。

その後のM児は、より精巧なものを作ることに没頭し、電車や飛行機など家庭をも巻き込んで数々の作品を作りました。今度はそんな姿に憧れをもった三歳児の女児と一緒に作ったりする姿も見られました。そこでは保育者を頼りにしていたM児ではなく、保育者と共に行った経験をもとに、女児に教えている姿が見られました。

〈子どもの数がだんだん少なくなってくるからこそ始まる遊びやかかわり〉

三学期、子どもたちの間でこんな会話がよく聞かれています。

「今日夕方までいる?」「おやつ食べた後で○



○しようよ」と誘いあっている姿です。夕方に残るのはこのメンバーということがだんだんわかってきて、それなら○○をしたいということを考えているようです。子ども自身が見通しをもって過ごしているように感じられます。

左の写真は、十七時過ぎ、だんだんと人が減りだした頃に始まった遊びの様子です。ブロックをつなげて遊んでいた子どもが、互いに作っていたものをつなげて長くし始めました。どれくらい長くできるかということを比べつつ、遊びつつ、試しています。この遊びの背景には、人が減ってきたからこそブロックがたくさんあり、スペースも広々していたということがあったと思います。

異年齢同士のかわりも大切にできました。本園はオープンスペース

スの保育なので、教育時間内の保育でも異年齢の子ども同士の出会いは豊富にあります。基本的にはクラスごとの活動が中心になります。一方、夕方の保育では少人数の保育になりますので、さまざまな年齢の子どもたちの出会いの機会が増え、一緒に遊んだり知らないことを教えてもらったりして、親しみや憧れを抱く機会にもなり、子ども同士の関係が広がっていくことを期待しています。

〈今後に向けて〉

子どもたちは登園から降園までの時間の中でさまざまな経験を重ねています。夕方の保育においても、一日一日、その場その場で違う姿を見せる子どもたちの具体的な姿から考えていくということが重要だと考えます。

これは夕方の保育の中で見えてきたことですが、保育の原点ではないかとも感じています。これからも試行錯誤しながらこの時間について考えていきたいです。（田島大輔）